

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 21 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26284100

研究課題名(和文) 気仙地域の歴史・考古・民俗学的総合研究

研究課題名(英文) Interdisciplinary Research into the History, Archaeology, and Folklore of the Kesen Region of Northeastern Japan

研究代表者

石川 日出志 (ISHIKAWA, Hideshi)

明治大学・文学部・教授

研究者番号：40159702

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,400,000円

研究成果の概要(和文)：気仙地域は、海・陸域の複合生態系が豊富な資源を生み出し、縄文時代から現代までそれらを活用した人類営為が展開した。本研究は、当地域の歴史文化を歴史・考古・民俗学の手法で研究し、地域の方々と行政に提供する。これは甚大な東日本大震災被害から復興する当地域の方々に支援する取組でもある。

調査は多岐に亘る。考古学では、古代・中世の漁撈関係遺物・集落遺跡データの集成、被災地域石碑の所在調査、中世塚・板碑群調査、中世城館群の縄張図作成等。歴史学では、中世遺跡群と文献史料との比較、熊谷家近世文書群の調査、大島正隆論文の公開等。民俗学では横田・小友地区で民俗慣行の調査と実施。3か年市民向け報告会を開催した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to reconstruct the history and culture of the Kesen region on the Pacific coast of northeastern Japan based on archaeological data, written sources, and folklore. Since prehistory, local people have fully utilized the rich natural resources of this region. In March 2011, however, the region was hard hit by earthquake and tsunami, resulting the destruction and loss of cultural properties. The research has been multi-faceted. In archaeology, we have compiled data related to settlements and fishing in ancient and medieval Japan, investigated historic stone stelae affected by the earthquake, surveyed medieval religious mounds and stelae, and mapped medieval forts. In history, we compiled early modern documents inherited in the Kumagai Family and published papers of Oshima Masataka(1909-1944). We also investigated the folk cultures of the Yokota and Otomo areas in this region.

研究分野：考古学

キーワード：日本史 考古学 民俗学 先史学 文化資源学 地域復興支援

1 . 研究開始当初の背景

(1) 三陸南部の気仙地域では、縄文時代から現代まで、三陸海岸と北上山地の複合生態系が生み出す多彩な資源を巧みに利用した人類営為が展開しており、それを物語る充実した歴史文化遺産がある。東日本大震災津波はこうした歴史文化遺産にも甚大な被害をもたらしたが、被災地ではこうした歴史文化遺産に地域のアイデンティティを見出し、地域の復興や再生に活かす取組みが始動した。しかし、これまでの考古学・歴史学・民俗学では一定の学問的蓄積はあるものの個別的な傾向があり、それに応えるだけの総合化を果たしていない。本研究では、気仙地域一帯に関するこれら3分野の研究を再構築するとともに、それらの成果を総合化することにより当地域の歴史的・文化的魅力を具体的に描き、地域に還元して震災からの復興と地域社会の魅力の継承に資することを目指す。

(2) 本研究の代表者・分担研究者は、2013年度に陸前高田市教育委員会が設置した「文化財等保存活用計画策定委員会」の構成員であった。文化庁が推進する「東日本大震災に伴う地域の文化遺産を活用した復興計画の策定に関する事業」の一環で始まった前委員会を再編して文化庁管轄の復興交付金に基づき単年度で成果の取りまとめが求められた。しかし調査を進めると、縄文時代の貝塚群、中世の城館群、近世吉田家文書、漁村地域の生活・宗教習俗など、これまでの研究では未解明の部分が多いことが判明した。にもかかわらず、現在進められる復興事業はハード面だけが優先され、「地域社会の復興」からの隔たりを見せ始めている。私たち考古・歴史・民俗学研究者は、学術従事者の良心として本研究でこれらの諸課題に取り組み、地域の方々と連携しながら当地域の歴史文化的特性を組み込んだ復興の実現に資することで合意し、本研究プロジェクトを立ち上げた。(引用文献 ・ 参照)

2 . 研究の目的

本研究の目的は、考古学・歴史学・民俗学研究の総合化による地域研究の実践と、学術による地域復興支援にある。

(1) 当地域に関する3分野の研究には一定の蓄積がある。しかし、考古学分野では、縄文時代の貝塚遺跡の研究だけに深化がみられるものの、遺跡群・集落群ととらえる視角が弱く、中世の城館群が多数知られているにも関わらず学術的な基礎調査は行われていない。歴史学分野では、中世以前の史料が乏しく、遺跡や石造物などを組み込む研究が少ない点や近世でさえもっとも重要な吉田家文書の本格的な調査がなされていない。民俗学分野では1960年代の調査成果はあるが、その後も特定の民俗のみを生活背景から分離して研究する傾向がある。

そこで、歴史・考古学分野では通時代的に見た際に従来充分焦点があてられていなかった時代や課題に注目し、研究するための基

礎資料を集成して、検討を進める。民俗学分野では、今回の大津波によって沿岸部は甚大な被害を受けたものの、地域に蓄積された諸民俗はなお保持されていることから、地域に注目した民俗調査によって地域の生活・民俗慣習の実態を把握することが必要である。

(2) 当地域の歴史・考古・民俗学的調査成果は一定の蓄積があり、歴史ある博物館活動を通して市民への還元が行われてきた。今回の震災・津波によって地域の文化とその蓄積は甚大な被害を受けたが、私たちが2013年度に上記委員会に出席する中で市民の方々に「失って初めてこの地域の歴史と文化の蓄積を強く感じた。だから、歴史・考古・民俗学の学術分野の研究成果を市民に還元し、広めてほしい」という強い要請があった。それゆえに(1)の学術成果を分かりやすく市民の方々に報告し、語り合う場を実現することを通して、地域復興支援を行う。

3 . 研究の方法

3分野でそれぞれ課題を設けて検討を行うが、基礎資料の集約が乏しい課題に関してはデータベース作成や基礎資料調査、現地調査を行い、それらの検討を進める。研究は多岐にわたるがその主要なもののみを挙げる。

(1) 考古学分野では、縄文時代貝塚遺跡の集成および貝塚を伴わない遺跡(集落)や洞穴(墓など)の分析により、三陸の海産資源に生活の基盤を置く縄文時代の人びとの生活を検討する、また骨刀の集成と石剣の生成を把握する、弥生・古代遺跡の集成を行うことによって、当地域の特性の把握に努める、城館群の縄張図作成により当地域の中世社会の特徴を描く、被災石造物などの所在調査などを行う。これらの調査には多数の専門家の支援を与えることから東北・北海道在住の協力者の支援をお願いする。

(2) 歴史学分野では、古代気仙地域および東北地方の古代城柵の調査・研究成果の収集により、古代国家の辺境政策および奥州藤原氏時代の平泉政権のあり方について検討する。中世城館群・板碑群の現状調査およびその分布と文献資料調査成果との比較検討。戦前に中近世の気仙地域の研究を行っていた大島正隆氏の未発表論文の活字化作業。近世資料として、気仙郡大肝入吉田家文書群や大肝煎熊谷家に関する資料の調査、などを行う。

(3) 民俗学分野では、陸前高田市内の生態・歴史条件の異なる3地域を取り上げて民俗調査を行い、民俗誌を作成する。特に横田・小友地区において生活・民俗慣習の調査を行う。横田地区は北上山地など内陸部とのつながりや気仙川の漁撈とも関わり、一方小友地区は漁村としての性格を帯びることから両地域の比較検討を行う。

4 . 研究成果

(1) 縄文時代に関しては、従来貝塚遺跡への注視が顕著であったが、気仙川流域の非貝塚遺跡や北上山中の洞穴遺跡に注目し、三陸

沿岸部と内陸域との間の物資や人的往来の状況が把握できた。骨刀の研究は資料的制約があって充分とは言えないが、縄文中期後半から後期前半に石剣に継承され小形化する状況が把握できた。

(2) 三陸地域の弥生時代遺跡を集成すると、農耕を行ったとは考えがたい立地であることが明瞭である一方で、気仙地域では仙台湾方面の土器が目立っており、沿岸部を南北に往来する状況を確認できた。

(3) 古代から中世の気仙・三陸地域の特色を検討する基礎資料として、東北地方太平洋側一帯の集落遺跡、および東北～北海道の貝塚・漁撈関係遺物のデータベース作成を精力的に行った(2017年内に明治大学古代学研究所HP公開予定)。詳細な分析は今後となるが、古代城柵の動向が集落や沿岸部の生業に影響を与える状況が確認できたのは大きな成果である。また古代関係の調査研究成果については2015年に公開研究会を開催した。

(4) 従来の考古学的調査成果の再検討から、鎮守府胆沢城の象徴である外郭南門と服属した蝦夷との関係を解明した。さらにヤマトタケル来征の副将軍大伴武日をはじめとする大伴氏系図(『古屋家家譜』)の分析により、陸前高田の地と武日伝承の関連を明らかにした。

(5) 中世城館群については、気仙川流域をはじめ11の城館跡の縄張り図を作成した。これにより、千葉氏系矢作氏から高田氏、浜田氏へと、拠点を海辺に進出させつつ気仙の旗頭へと成長する過程が読み取れた。また海辺の城館で金氏の城は二日市城のみだが、浜田氏の米ヶ崎城は二日市城と対峙しており、古代以来の気仙郡司にあった金氏の拠点が、米ヶ崎にも置かれた可能性がある。高田氏の高田城は、その規模と遺構の特徴から天正19年(1591)に豊臣軍の石田三成が大原城と共に改修し伊達政宗に引き渡した気仙城と考えられる。世田米城と上原館城は内陸と沿岸部を結ぶ要地にあり、森林資源や街道や宿駅、定期市などが存立基盤であった。本町との関係から上原館城が本来の世田米城であり、下館とも呼ばれる世田米城は、上原館城の支城であったが、最終的には世田米城が(下館)が本城となった。城館の構造を把握して群として分析することでこうした歴史像の具体化が可能となった。「伊達家文書」における気仙郡関係史料の調査や城館群の実地調査を行って、文献史学との共同も大きく進んだ。さらに、陸前高田市二日市館内部に所在する塚状遺構の測量調査、気仙沼市上鹿折板碑群の調査を行い、文献資料の少ない当地域を考える基礎資料を整備した。

(6) 戦前に気仙地域の中近世を探究した成果として貴重な大島正隆未発表論文(卒業論文)の翻刻を行った(引用文献)。

(7) 近世については、吉田家文書自体の検討は所蔵機関独自の事業とされたために果たせなかったが、吉田家文書の写真撮影文書

の史料目録を作成した。その過程で得た家譜などから、吉田家が伊達政宗によって気仙郡大肝入に登用され今泉村に転居した経緯などが明らかになり、また吉田家が明治時代に開発した鉱山の写真や史料などが発見された。さらに、江戸時代における気仙地方の生業関係史料および文献調査で、気仙地域は漁業技術の発達によって漁獲量が向上して大幅な人口増が起きたことや、海産物の煎海鼠(イコ)、干鮑(ホアヅ)、鱧鱈(カヒレ)は1700年頃以降に長崎から中国に輸出される俵物として気仙地方でも集荷されたこと、1800年代に入ると三陸沿岸に異国船が出現し、とくに英米の捕鯨船による乱獲の影響で気仙地方の漁獲に大きな影響が出たことなどが確認できた。

(8) 陸前高田市内の津波被災石碑調査で、全1725基中、流失97基、転倒・折損等356基、計453基を確認した。同市内の石碑の種類と時代の分析から、江戸前期～中期の種子塔や念仏塔、仏尊塔中心の仏教的色彩から江戸後期には神祇塔、山岳信仰碑、自然神塔、動物霊塔など神祇的色彩へ移行することが判明した。近世以降の石碑は、江戸時代初期から確認され、明治・大正・昭和戦前まで継続して建碑されており、石碑に表象される民衆文化の画期が第2次世界大戦後に起きたことを明らかにした。また、講や地域単位で建碑する例が多く、強い地域共同体の結びつきによることを明らかにした。

(9) 民俗学分野では、横田・小友両地区での調査によって、陸前高田市における民俗の地域性が、内陸部と海岸部とで大きく異なることを確認できた。このような地域性を、生業経済、人生儀礼、集落会館や集落間関係、祭礼や信仰といった生活の諸側面の民俗、及びそれらが地域社会内で相互関連する様相から明らかにした。また、震災や津波に対する経験が、内陸部と海岸部との間でどう異なり、共通するのかを考える材料となった。また調査成果については対象地域で市民向けに報告会を開催した。

(10) 以上要点のみ記したが、歴史・考古・民俗学3分野の3ヶ年の調査研究は多岐にわたる。その研究成果を毎年、気仙地域3市町のご協力を得て市民向けに報告する会<歴史・考古・民俗学から気仙地域の魅力を語る . . . >を年度末に開催した。毎回150～170名の参加があり、質疑の場ではこうした研究の重要性を語る発言が繰り返されたのは、当方こそが刺戟をうけたと感じる。地域紙に繰り返し報道されたことも同じであろう。そもそも、地域の方々のご支援を得て初めて実行できたこの科研プロジェクトなのだから。

このほか、民俗学分野では独自に調査対象地(小友地区・横田地区)で市民向け報告会、歴史・考古学分野で研究集会「奥州藤原氏平泉政権と気仙地域」を開催して、研究成果の社会還元を努めた。

<引用文献>

石川日出志・七海雅人(編), 科学研究費補助金・基盤研究(B): 研究成果報告書 気仙地域の歴史・考古・民俗学的総合研究 課題番号: 26284100 研究期間: 平成 26 (2014) 年度~平成 28 (2016) 年度, 研究代表者石川日出志, 2017, 1-156・1-80

中野泰(編), 川と海の民俗誌: 陸前高田市横田・小友地区民俗調査報告書 気仙地域の歴史・考古・民俗学的総合研究・民俗学部門報告書, 筑波大学人文学系中野泰研究室, 2017, 1-118

5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 13 件)

平川 南, 出土文字から描く古代社会 - 道・文書・口頭による伝達 -, 中央史学, 査読無, 第 39 号, 2016, 2 22, 中央史学会

平川新, 未来へ伝える文化財防災, 文化財保存修復学会誌, 査読無, Vol.60, 文化財保存修復学会, 2017, 47 61

平川新, 地域の史料と向き合う - フィールドワークと郷土を愛すること, 歴史学研究, 招待論文, 924 号, 180-189, 2014

今井健太郎・前田拓人・飯沼卓史・蝦名裕二・菅原大助・今村文彦・平川新, 組み合わせ最適化手法を利用した歴史津波の波源推定法 1611 年慶弔奥州地震の事例, 東北地域災害科学研究, 第 51 巻, 自然災害研究協議会東北地区部会, 査読有, 139 144, 2015

平川新, 地震・津波に関する研究と災害科学研究のあり方, 地殻災害の軽減と学術・教育, 日本学術協力財団, 査読無, 49 62, 2016

川島秀一, 「東北」の過去から未来へ向けて - 津波と三陸沿岸をめくって, 歴史地理教育, 3 月号増刊, 102-111, 査読無, 2015

八木光則, 総論: 蝦夷の考古学, 考古学ジャーナル, 査読無, No.688, 3-4, ニューサイエンス社, 2016 年 9 月 30 日

八木光則, 「入の沢遺跡」の頃の東北北部社会, 別冊季刊考古学, 査読無, 24, 雄山閣出版, 2017, 73 86

宇部則保, 奥入瀬川流域遺跡群, 『北東北 9・10 世紀社会の変動研究報告資料集』, 査読無, 209 220, 日本考古学協会 2016 年度弘前大会実行委員会, 2016

竹井英文, 城郭研究のフロンティア: 東北, 歴史書通信, 査読無, 228, 2016, 2 4

竹井英文, 南北朝~戦国前期の「陣」について, 東北学院大学論集: 歴史と文化, 査読無, 第 55 号, 2017, 1 29

竹井英文, 城郭研究の現在, 歴史評論, 査読無, 第 787 号, 17 26, 2015

竹井英文, 織豊政権と「正典」「天下」「惣無事」をめぐる研究動向, 歴史学研究, 査読無, 第 937 号, 61 70・82, 2015 (学会発表)(計 25 件)

石川日出志, 5 年間の活動から見た今後への提言, 日本考古学協会第 82 回総会, 2016 年 5 月 29 日

平川南, 古代東北「海道」をゆく, 古代城柵官衙検討会, 東北歴史博物館, 2015 年 3 月 1 日

佐藤信, 趣旨説明: 古代東国の地方官衙と寺院, 史学会例会<古代東国の地方官衙と寺院>, 東京大学, 2015 年 9 月 5 日

平川新, 歴史に見る災害と安全, 国立大学環境安全協議会総会, 東北大学工学部, 2016 年 7 月 21 日

平川新, 立ち直る力 歴史にみる災害と復興, 農業農村工学会大会特別講演, 2016 年 8 月 30 日, 江陽グランドホテル(仙台)

平川新, 歴史から災害を読み取る, 日本応用地質学会全国大会総会講演, 2016 年 10 月 26 日, 仙台市青年文化センター

平川新, 歴史研究と郷土史, 東北アジア研究センターシンポジウム「歴史資料学と地域史研究」, 東北大学, 2017 年 2 月 12 日

七海雅人, 中世本吉・気仙地域の論点 歴史学の立場から, 2016 年度宮城県考古学会研究発表会<南三陸地域の中世社会>, 仙台市博物館, 2016 年 5 月 15 日

七海雅人, 近世仙台領成立期周縁地域の動向 秋保と気仙・本吉の地域, 仙台郷土研究会総会・講演会, 仙台市戦災復興記念館, 2014 年 6 月 22 日

竹井英文, 最近の関東における中近世城館跡研究について, 宮城県考古学会中世考古学部会, 東北歴史博物館, 2014 年 7 月 12 日

八木光則, 岩手県の復興調査の現状と課題, 一般社団法人日本考古学協会第 82 回総会, 2015 年 5 月 29 日

八木光則, 平安時代の北奥蝦夷社会, 北東北歴史懇話会, 秋田県大館市中央公民館, 2016 年 10 月 29 日

八木光則, 平泉の居館と居宅, 蝦夷研究会, 岩手大学, 2016 年 9 月 24 日

八木光則, 末期古墳研究の新たな 3 つの視点, 蝦夷研究会, 岩手大学, 2017 年 3 月 18 日

七海雅人, 中世本吉・気仙地域の論点 歴史学の立場から, 2016 年度宮城県考古学会研究発表会「南三陸地域の中世社会」, 仙台市博物館ホール 2016 年 5 月 15 日

竹井英文, 城郭研究の現在, 福島県文化財センター白河館 15 周年記念指定文化財展「城跡の考古学」関連シンポジウム第 1 回

城跡を掘る 「城跡研究のいま」, 福島県文化財センター白河館 2016 年 10 月 29 日

竹井英文, 南北朝~戦国初期東国の「陣」について, 本城郭史学会大会, 江戸東京博物館, 2015 年 4 月 25 日

竹井英文, 織豊期の「天下」「惣無事」について, 東北学院大学中世史研究会第48回大会, 仙台市博物館, 2015年12月20日

千田嘉博, 近世城郭史料論, 全国城郭研究²¹者セミナー, 九州大学, 2014年8月3日

千田嘉博, 中世東北の城と日本の城, 脇本城シンポジウム, 秋田県男鹿市, 2014年12月13日

²¹小谷竜介, 災害後に民俗芸能を続ける意味 東日本大震災後の被災地から, 公演・パネルディスカッション, 民俗芸能サミット<南予藝能講座 鹿踊りの系譜>, 愛媛県歴史文化博物館(愛媛県西予市), 2016年5月28日

²²小谷竜介・我妻和樹・政岡伸洋, 地域の暮らしを描く, 東北学院大学文学部民俗学研究室<地域の営みをいかに描くか~震災前の暮らしと被災地の今を巡って>, 東北学院大学, 2014年9月20日

²³小谷竜介, 被災した芸能用具とその再生 無形民俗文化財と東日本大震災, 宮城県文化財地区指導員研修会, 宮城県教育庁文化財保護課, 東北歴史博物館, 2014年11月5日

²⁴辻本侑生, 昭和三陸津波からの復興に関する歴史地理学的研究 岩手県気仙地方の沿海村落を事例に, 人文地理学会第139回歴史地理研究部会, 京都大学, 2015年7月25日

²⁵辻本侑生, 昭和三陸津波の忘却と記憶 岩手県沿岸部における『3月3日』の諸相, 日本民俗学第883回談話会, 2015年11月8日, 成城大学

[図書](計16件)

石川日出志・七海雅人(編)2017『科学研究費補助金・基盤研究(B):研究成果報告書 気仙地域の歴史・考古・民俗学的総合研究 課題番号:26284100 研究期間:平成26(2014)年度~平成28(2016)年度 研究代表者:石川日出志(明治大学文学部教授)2017年3月,総156+80ページ

中野泰(編)『川と海の民俗誌:陸前高田市横田・小友地区民俗調査報告書 気仙地域の歴史・考古・民俗学的総合研究・民俗学部門報告書』筑波大学人文学系中野泰研究室

川島秀一, 海に生きる作法 漁師から学ぶ災害観, 富山房インターナショナル, 2017, 1-227

川島秀一, 安さんのカツオ漁, 富山房インターナショナル, 2015, 1-301

陸前高田市教育委員会(石川日出志・平川南・佐藤信・平川新・七海雅人・中野泰ほか)2014, 陸前高田市文化財等保存活用計画策定調査業務報告書資料編, 陸前高田市教育委員会

東日本対策特別委員会(渋谷孝雄・近藤英夫・飯島義雄・石川日出志・菊地芳朗・佐藤宏之・高倉敏明・玉川一郎・八木光則・富山直人・渡邊泰伸ほか), 日本考古学協

会東日本大震災対策特別委員会報告書, 一般社団法人日本考古学協会, 2017, 1-233

平川南, 律令国郡里制の実像(上・下), 吉川弘文館, 2014, 1-805

高橋典幸編, 生活と文化の歴史学5 戦争と平和, 竹林舎, 2014, 1-536(竹井英文「戦国期の戦争と古城」335-359)

平川新・千葉正樹(編著), 講座 東北の歴史, 第2巻, 1-275頁, 清文堂出版

平川新(編著), 江戸時代の政治と地域社会, 第1巻, 1-265, 清文堂出版, 2014

平川新(編著), 江戸時代の政治と地域社会, 第2巻, 1-262, 清文堂出版, 2015

樋口知志編(小口雅史・八木光則・島田祐悦・窪田大介・樋口知志), 東北の古代史, 第5巻, 吉川弘文館, 2016年, 1-278(八木, 古墳時代併行期の北日本, 47-78)

熊谷公男編(熊谷公男・樋口知志・鈴木拓也・伊藤博幸・八木光則), アテルイと東北 古代史, 高志書院, 2016年, 1-263

小口雅史編(伊藤武士・熊谷公男・小口雅史・八木光則・宇田川浩一ほか), 北方世界と秋田城, 吉川弘文館, 2016年, 1-278(八木, 城柵構造からみた秋田城の特質, 81-102)

渡邊大門編『戦国史の俗説を覆す』, 柏書房, 2016年10月, 総ページ数:267ページ(竹井英文, 城郭研究を揺るがした「杉山城問題」とは!? , 128-144)

佐藤博信編, 中世東国の政治と経済』, 岩田書院, 2016, 1-348(竹井英文, 天正十三・十四年の下野国の政治情勢 関連史料の再検討を通じて , 187-213)

[その他:本科研主催研究会・報告会]

本科研:市民向け報告会<歴史・考古・民俗学から気仙地域の魅力を語る >, 住田町農林会館, 2017年2月11日

- ・平川南, 挨拶・趣旨説明
- ・石川日出志, 北上山地の洞穴遺跡 縄文・弥生時代の三陸海岸と北上山地
- ・八木光則, 古代三陸の蝦夷社会
- ・室野秀文, 気仙川流域の中世城館調査報告
- ・蝦名裕一, 伊達政宗の気仙郡統治
- ・川島秀一, 津波が通った集落の漁業と信仰

本科研:市民向け報告会<歴史・考古・民俗学から気仙地域の魅力を語る >

「歴史・考古・民俗学から気仙地域の魅力を語る」, 陸前高田市コミュニティホール, 2016年2月21日

- ・平川南, 挨拶・趣旨説明
- ・石川日出志, 三陸に弥生遺跡が少ないのはなぜか
- ・佐藤信, 奥州藤原氏政権と気仙地域
- ・竹井英文, 中近世移行期の気仙周辺地域 - 城館跡を中心に -
- ・平川新, 江戸時代の気仙地方」
- ・中野泰, 陸前高田市における行屋と民俗の地域性

本科研：市民向け報告会<歴史・考古・民俗学から気仙地域の魅力を語る>，陸前高田市横田コミュニティセンター，2015年2月15日

- ・石川日出志，挨拶・趣旨説明
- ・平川南，躍動する古代の気仙地域
- ・七海雅人，鎌倉・南北朝期の気仙・本吉地域
- ・羽柴直人，考古学から見た奥州藤原氏時代の気仙
- ・石川日出志，縄文・弥生時代の気仙地域 北と南をつなぐ
- ・八木光則，陸前高田の石碑
- ・小谷竜介，地域社会の繋がりを考える 神社の祭礼と七夕行事から

本科研研究会：奥州藤原氏平泉政権と気仙地域>，盛岡市アイーナ，2015年10月3日・4日

- ・佐藤信，趣旨説明・奥州平泉藤原氏政権と気仙地域
- ・八木光則，平泉政権と気仙地域をめぐる考古学的検討
- ・八重樫忠郎，平泉政権時代の経塚
- ・樋口知志，平泉政権と気仙地域の歴史的検討
- ・七海雅人，平泉政権と気仙地

本科研：小友地区民俗調査報告会，小友ふるさとセンター，2017年3月4日

- ・辻本侑生・戸羽清次，昭和三陸津波以前の只出集落を復原する」
- ・浅野久枝，オナゴがささえる社会

本科研：横田地区民俗調査報告会，横田町2区部落会館，2017年3月5日

- ・藤野哲寛，横田における川魚とその流通
- ・中野泰，行屋と会館の民俗

本科研：小友地区民俗調査報告会，2015年6月21日，岩手県陸前高田市小友ふるさとセンター

- ・中野泰，行屋の民俗
- ・小谷竜介，七夕からみる小友地区

ホームページ等

明治大学国際日本古代学研究クラスター
日本古代学研究所

<http://www.kisc.meiji.ac.jp/~meikodai/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石川 日出志 (ISHIKAWA, Hideshi)

明治大学・文学部・教授

研究者番号： 40159702

(2) 研究分担者

平川 南 (HIRAKAWA, Minami)

人間文化研究機構本部・理事

研究者番号： 90156654

(3) 研究分担者

佐藤 信 (SATO, Makoto)

東京大学大学院人文社会系研究科・教授

研究者番号： 80132744

(4) 研究分担者

平川 新 (HIRAKAWA, Arata)

宮城女子大学・学長

研究者番号： 90142900

(5) 研究分担者

七海 雅人 (NANAMI, Masato)

東北学院大学文学部・教授

研究者番号： 00405888

(6) 研究分担者

中野 泰 (NAKANO, Yasushi)

筑波大学大学院人文社会系・准教授

研究者番号： 20323222

(7) 連携研究者

千田 嘉博 (SENDA, Yoshihiro)

奈良大学文学部・教授

研究者番号： 70226695

(8) 連携研究者

川島 秀一 (KAWASHIMA, Syuichi)

東北大学災害科学国際研究所・教授

研究者番号： 30639878

(9) 連携研究者

浅野 久枝 (ASANO, Hisae)

京都精華大学人文学部・講師

研究者番号： 20700008

(10) 研究協力者

竹井 英文 (TAKEI, Hidefumi)

(11) 研究協力者

八木 光則 (YAGI, Mitsunori)

(12) 研究協力者

安達 訓仁 (ADACHI, Kunihito)

(13) 研究協力者

宇部 則保 (UBE, Noriyasu)

(14) 研究協力者

菅野 智則 (KANNO, Tomonori)

(15) 研究協力者

斉藤 慶吏 (SAITO, Yasushi)

(16) 研究協力者

佐藤 剛 (SATO, Tsuyoshi)

(17) 研究協力者

菅原 弘樹 (SUGAWARA, Hiroki)

(18) 研究協力者

高橋 憲太郎 (TAKASHI, Kentaro)

(19) 研究協力者

千葉 剛史 (CHIBA, Tsuyoshi)

(20) 研究協力者

福井 淳一 (FUKUI, Junnichi)

(21) 研究協力者

室野 秀文 (MURONO, Hidefumi)

(22) 研究協力者

小谷 竜介 (KOTANI, Ryusuke)

(23) 研究協力者

辻本 侑生 (TSUJIMOTO, Ikuo)

(24) 研究協力者

藤野 哲寛 (FUJINO, Tetsuhiro)